

『天台一宗超過達磨章』に見られる禅宗批判

Stephan Licha

一 問題の所在

禅宗の日本への伝播とその後の展開は多くの研究者の注目するところであるが、その展開の過程を考察するにあたり、多くの先行研究は自己完結した禅宗像を前提とし、その視点からの禅宗史を理解する試みと言える。そこで、ここでは、今でも不明な点が多い、禅宗史上での他の宗派との相互交渉に着目することにした。研究の現状として、真言宗や日蓮宗での禅宗観に対する研究は既になされているものの、天台宗における禅宗観はあまり知られているとは言えない。そのような状況の中で、第百代の天台座主であった良助法親王（一二六八—一三三八）の著作とされる『天台一宗超過達磨章』（以下で『達磨章』と省略）は、この問題の解決の糸口となる著作と考えられる。^①『達磨章』は大覚寺で院政を行う後宇多法皇（一二六七—一三三四）臨席のもと、良助と三人の禅僧との間で起こる論争を想定した、架空の問答を記述する資料で

あり、禅宗に対する天台宗からの論駁を表明する古文獻である。さらに、『達磨章』には、他の天台宗の資料と比べても極めて特徴的な禅宗への批判が見られる。小稿は『達磨章』で言及される禅宗批判の特徴、すなわち、天台宗における禅宗観の一端を明らかにすることを目的とする。

二 『達磨章』の概要

『達磨章』には、良助と議論を交わす禅僧として、南浦紹明（一二三五—一三〇九）、一山一寧（一二四七—一三二七）と高峰顕日（一二四一—一三二六）という三人が登場し、いずれも鎌倉時代後期の禅宗を代表する僧侶であると言える。

これらの禅僧と良助との間で繰り広げられた問答は、主に七つに分けられる。そこで、まずは、七つの問答の内容を特に良助の立場から概説したい。第一の問答では、良助による禅宗の祖師相承説の批判が行われる。この批判の内容に関しては後で考察する。第二には、良助は、禅宗は文字の無自性

を証する「文字般若」を欠く、と論難する。第三の問答は、良助が、教の内外観を「生ずる」禅宗と「超越する」天台宗として、禅宗に対する天台宗の優越性を主張する。第四の問答での良助の主張は、生死の「識」に基づく禅宗に対して、天台は生死の「超越」を説くことにある。つまり、禅宗の悟りを「迷ノ中迷悟^{ナレハ}、迷悟供ニ迷^{ナリ}」と非難するのである。第五の問答においては、良助が外道の經典を尊重し、一方で仏法を破壊する禅僧を非難することが挙げられる。第六の問答では、禅宗が天下を守ることを忘れるという非難がなされている。最後の問答に関しては、これも最初の問答の内容と同じく、後に考察するところとなるが、要するに、禅宗は地位に従う宗派であるがゆえに、「円頓」の天台宗に及ばないということである。

以上は、良助による禅宗批判の概説で、特に第一と第七の問答には良助の禅宗解釈の枢要が見出されると考えられる。そこで、この二点を中心に、以下に内容の分析を行っていきたい。

三 相承の論争

第一の問答で、天台宗による禅宗の祖師相承説を非難するということに関して、禅宗側からの主張を見ることから始めたい。対論者の南浦紹明は自らの禅宗を「仏心宗」と呼び、

その相承説を次のように説明する。

凡我^カ仏心宗^ハ号^ニ向上ノ一路^ハ仏祖不伝^{トハ}。而教外^ニ別^ニ伝^テ不^レ立^ニ文字^一付^ニ摩訶迦葉^一。仏祖靈山^テ、拈花瞬目、破顔微笑^{シテ}不立文字^一。教外^ニ別^ニ伝^シ摩訶迦葉^一以来西天ノ廿八祖直示直伝^{シテ}以^ニ授衣^一。授鉢^ヲ為^ニ見性得法^一瑞^ニ。三国相承^{シテ}遺塵未^レ断。天竺廿八祖付法^ノ頌分明^{ナリ}。震旦・日域^ニ衣鉢伝授^ノ次第天下^ニ無^レ隠所^一達磨宗^ハ狂惑宗^{ナリト}被^レ詢条希代ノ勝事也。如何。

南浦紹明は禅宗における伝統的な相承説の正統性を、ここで断言するのである。それに対して良助は、天台宗の金口相承を唱え、次のように禅宗を批判する。

達磨^ハ狂惑宗^{ナリト}云事^ハ非^ニ予^カ私^ノ所立^一。是釈尊ノ未来記^{ナリ}。釈尊ノ未来記者如^ニ汝申^一仏祖靈山、拈花瞬目破顔微笑^{シテ}吾^ニ有^ニ正法眼蔵^一。教外^ニ別^ニ伝^テ不^レ立^ニ文字^一付^ニ摩訶迦葉^一。迦葉付^ニ阿難^一、阿難付^ニ商那和修^一、如是展転^{シテ}至^ニ第廿四師子比丘^一我法^ハ滅尽^{スベシ}。

続けて良助は、禅宗に対する決定的な糾弾として、「達磨宗以下ノ禅僧^ハ皆是仏法ノ中盜賊也。」と表明し、極めて厳しい言辞をもって批判をなしている。このような良助の二十四祖論に対して那須の高峰は、その二十四祖論を次のように非難する。

然則付法蔵經^ニ師子比丘ノ時滅尽^{セシ}仏法^ハ教ノ付法^ノ滅^{シテ}有^ニラン^一禅ノ付法^ハ不^レ滅。如何。

つまり、高峰は教内と教外の区別によって、教内の相承は師子比丘の時点で断絶したものの、禅宗の教外別伝の相承はそ

れとは別に綿々と続くものである、と説明するのである。それに対して良助は次のように答える。

那須カ邪推比（丘）ナリ。天竺ノ教外別伝ノ宗ハ師子比丘マテ伝ハ来テ其後ニ滅尽ス。然則仏祖ノ付法曰、吾ニ有ニ正法眼蔵一。涅槃ナリ、如真ナリ、実相ノ微妙ノ法門ナリ。教ノ外ニ別ニ伝テ不シテ立ニ文字ヲ付ニ摩訶迦葉一以上 又付法蔵経曰、仏告ニ摩訶迦葉、我カ無上ノ正法ハ世間ノ眼蔵ナリ、涅槃ナリ、妙法ナリ。以上 又云ク、弥羅掘以ニ利釵ヲ斬ニ師子比丘一付法ノ人指レ是滅尽ス。賢聖隱没ス。共世間闇冥永ク失ニ大明一。以上 那須ノ長老未レ知耶。教外別伝トハ何法門ヲカ別ニ伝タリケン。応ニ知、教外別伝者、正法眼蔵・涅槃妙真実相ナリ。師子比丘ノ時滅尽セシ。

ここで良助は、釈迦牟尼仏から摩訶迦葉へ伝えられた仏法が、教外別伝・不立文字の法門そのものであり、その法門こそ師子比丘の時に断絶した、という技巧的解釈を用いるのである。すなわち、このような解釈に基づき、良助は禅宗の相承そのものを論駁することが可能になったのである。

四 仏心宗と方便

第七の問答では、良助は禅宗が地位に従う仏法であるとする。先ず良助は禅宗の公案問答を難詰する質問を掲げる。

一山禪師申云、凡ソ禪祖ノ向上ノ一路ハ仏祖不伝ナリ。若爾者、仏祖不伝ノ上ニ何ナルカ天台仏法ヲ立耶。予答曰、一念三千矣。一山問曰、一念未生ノ前ニ三千安有矣。予答曰、本理ノ一念三千矣。一山問曰、本理ノ一念未生ノ前ニ三千安有矣。（予答曰、虚空未生ノ前ニ虚空安

有矣。）時一山微笑シ、高峯云感、南浦ハ吟シタ矣。

このように良助は、達磨宗の「向上一路仏祖不伝」の上に、天台宗の一念三千があるという批判的論陣を張り、二つの視点からその証明を試みるのである。第一は、達磨宗と仏心宗を区別し、中国発祥である達磨宗の「向上一路の仏祖不伝」という教えが印度以来の仏心宗にも存在した、とする説を否定することであり、第二は、達磨宗が方便宗である、ということである。すなわち、良助は次のように解説する。

向上一路ハ仏祖不伝ト云事ハ天竺ノ仏心宗ニ無シ事ナリ。而震旦ニテ近此口出来ル（邪）義ナリ。

ここでの言説は、前に紹介した禅宗相承の批判と近い関係があり、達磨宗の相承説を歴史的に論難することによって、良助は印度以来の正統な仏心宗の教外別伝と区別し、達磨宗の教えを中国で創作された宗義として批判できるようにするのである。次に、良助が中国の達磨宗を方便宗とすることに關して、以下のような言説が注目される。

所詮達磨宗ハ方便ノ宗ナリ。教外別伝ノ伝ハ実相真如ノ理ナリ。正直ニ不レ言ニ実相真如トハ。或ハ名ニ理致ト、或ハ称ニ機関ト、或ハ号ニ向上ト、開ニ実相ノ門ト、称ニ三ノ方便ト。（中略）此等ハ皆教外別伝ノ実相ノ門外ノ方便也。

要するに、良助によれば、達磨禅宗とは中国で興った門流であり、非正統な仏伝であると言うのみならず、亜流の仏教

であると換言することが可能ではないだろうか。

五 三種の方便について

その三種の方便、すなわち理致・機関・向上は、良助の個人的見解ではなく、円爾弁円（二二〇二—二二八〇）の『聖一国師語録』にも確認され、その中で円爾は三種の方便を次のように定義する。

然雖^レ如是、須^レ知^レ有^二接手方便^一。一、坐禪方便。二、直示方便。坐禪者、大定也。直示者、大慧也。蓋^二空劫以前、威音那畔、無師自發^一。無^二此等方便^一。達磨所^レ示、潛付密証是也。空劫以後、有^レ悟、有^レ迷、有^レ問、有^レ答、有^レ師、有^レ資。皆是接手方便也。仏祖出興、有^二理致^一、有^二機関^一、有^二向上^一、有^二向下^一。

円爾によれば、三種の方便とは「空劫以後」、つまり有無・迷悟・凡聖等の相対差別の上で存在するというものである。しかし、円爾はその方便を明らかに「空劫以前」という絶対的存在に対照し、両方を禪宗の教えに含むことを説き、一方、良助はそれを確認することなく禪宗そのものを方便宗とし、「迷^ノ中迷悟^{ナレハ}、迷悟供^ニ迷^{ナリ}」という表現でその弱点を示すと言えないであろうか。このことが示唆するのは、円爾の名前が出て来ないにも拘らず、良助の禪宗を方便宗とする批判は、そもそものが、円爾に向けた非難であり、さらに、円爾の影響下で形成された指弾である、と考える可能性

である。

六 結論にかえて

『達磨章』の禪宗批判、特に歴史上の禪宗相承への非難と理致・機関・向上からなる三種方便説に対する非難から、これらの二つが『達磨章』の禪宗観の特徴であると言っても過言ではない。ちなみに、他の類似する例は、杲宝（二三〇六—一三六二）の『開心抄』でも二十四祖説が確認される。このことは、『達磨章』や関連する資料が、ともに中国天台宗の子昉（生没年不詳）と禪宗の契嵩（一〇〇七—一〇七二）との間に起こった論争の影響を受けた可能性が推察される。その論争を継承した形で、日本における祖師相承論とは、禪宗と、特に真言宗、天台宗との間における論争の一つの焦点であったと考えられるのではなかろうか。さらに、日蓮（一二三三—一二八二）の『蓮盛鈔』にも禪宗の祖師相承の批判が確認される。⁽³⁾ 日蓮は金口相承を強調することよりも、「拈花瞬目、破顔微笑」の拠り所である『大梵天王問仏決疑經』の正統性に疑問を呈するのである。日蓮が禪宗を「教外別伝・不立文字」とするのは通常の理解と大きな差異はないが、注目すべきは『蓮盛鈔』は『達磨章』と同様に「向上一路千聖不伝」〔『達磨章』は「仏祖不伝」とする〕という表現を挙げることにある。さらに、日蓮の『諸宗問答抄』には三種方便への批判

が認められるのである。⁽⁴⁾ その事実を考慮に入れると、禪宗が「向上一路千聖不伝」、または「三種方便」であることは、天台宗、またはその周辺にある宗派の中で、共通した禪宗観として捉えられていたと言えるのである。何れにしても、『達磨章』での禪宗への論駁は、例外的に説得力のある言説であると考えられよう。

- 1 底本『天台一宗超過達磨章』叡山文庫、真如蔵、二四・一・一三九。対校本「天台一宗超過達磨章」『止観座禅記』叡山文庫、天海蔵、九・七・一六一。(一)は対校本の挿入。 2 大正八〇・二〇頁下。 3 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮聖人遺文』(総本山身延久遠寺、一九五二)第一卷、一七―二二頁。 4 藤本日潤編『日蓮大聖人御書』(日蓮正宗総本山大石寺、二〇〇二)第一卷、四八―五一頁。
- 〈キーワード〉『天台一宗超過達磨章』、良助、円爾弁円、禪宗批判

(早稲田大学外国人研究員)

『天台一宗超過達磨章』に見られる禪宗批判 (S. LUCHA)

新刊紹介

大久保 良峻 編著

天台学探尋

日本の文化・思想の核心を探る

A五版・三二九頁・本体価格三、六〇〇円
法蔵館・二〇一四年三月